

---

デジタルパンク通信 第二十四話

---

Q 黄金バットでしょうか。巨人の星でしょうか。

A 巨人の星です。

オロナミンCのホーローの看板は、黄金バットとか、アタックNo.1が描いてあるやつがレアーなんだ。石井克人監督『鮫肌男と桃尻女』で岸部一徳がそうつぶやくシーンがある。昔ぼくが持っていたのは、星飛雄馬が描いてあるやつだった。それも巨人軍ではなく、青雲高校のS字が帽子に描いてあるやつなので、そこそこレアーだったんだろう。それは、雄琴で拾った。琵琶湖の脇、ソーランドが立ち並ぶ町の片隅に、由美かおるや水原弘が微笑むアース渦巻やベープの看板に混じって捨てられていた。ホーロー看板さがしの旅をしていたぼくは、白昼、アオカナブンやスズメバチに混じってうずくまっているカブトムシを見つけたようなうれしさを覚えた。拾い上げて、あらかじめ持参したドラムスティックで叩いてみた。少し深いカンカン音が鳴った。そうだ、この音だ。この音が欲しかった。

ガラスを割る音も欲しかった。だが、ライブでガラスを割ってみても、スカッとしたガシャーン音が得られない。いろいろ工夫をした。結局、シンバルをグニグニに曲げて、ヒビを入れてみたら、パシャンという近似音が出た。その過程で、ギターに弦にガラスの灰皿を乗せ金属棒で叩くと、キャンという透き通った音がすることがわかった。そういう音をバックに、「ヘッケルとジャツケル」で流れるような安っぽいオルガン流して、たて笛を吹きながら、韓国民謡のような歌をうたう。それがしてみたい。無意味だ。かなり馬鹿げている。バカですねー。でも、京大西部講堂で、1000人ものパンク連中を前に、そんなライブを強行した。そうすると、無意味を通り越して、かなり危険だ。アブナイですねー。今から20年前のことだ。

そんなこと、すっかり忘れていたんだが、そのころのバンド仲間が当時のナマ音を押入から引っ張り出してCDを作って発売したってんで、思いだすハメになった。収録16曲中、自分が5曲ばかり歌ったり曲を作ったりして関わっている。いま聴くと火を噴くほどはずかしい。当時、そんな活動と並んで手がけていた少年ナイフは、後に海外で知られるようになった。そのころ朝から晩まで地面に寝転がってラッパ吹いていた兄貴は、しばらくして姿を見せなくなったが、もうしばらくするとテレビでみかけるようになった。近藤等則という名だということも知った。2年後輩の「どんと」という名の男は、2年先輩の「キョン」とともにボ・ガンボスを結成した。確立されたロック表現を壊して何かを創ろうとしていた。まるごと世界観をひっくり返す。それを音楽でやろうと思っていた。過激なやつらがシーンに集まっていた。やみくもな若さだった。

もちろん、実現していない。少なくともぼくは、何も実現させていない。させていないが、あきらめてはいない。まだこれからだと思っている。これからやで。あきらめて、たまるか。(次号に続く)

---